

—村史こぼれ話7—

いづみりゅうとうじ 泉流杜氏

弥彦山系の清水は名水が多く、「親はもろはく、子は清水」をはじめ、いくつかの伝説が今に伝わっています。「もろはく」とは白米だけで作った上等の酒をいう）弥彦村の弥彦酒造は泉流杜氏のくらもと蔵元として知られています。『新潟県酒造史』の「杜氏」の項には概略次のように書かれています。

「杜氏の養成について最も貢献があったのは、西蒲原郡弥彦村上泉の多賀佐七郎（じほう二峰）である。多賀家は、代々曾根村（現西川町曾根）の豪農で醸酒を兼業していた多賀卯八郎の分家で、佐七郎が初代である。佐七郎は天保年間（1830～44）に自分が何度も醸造に失敗したことを顧みて、遠近の同業を巡りその醸法を問い、専心研究の末、大阪流、灘流を折衷して一つの醸造法を創始したのを泉流という。他に失敗する者があれば同情して、必ず赴いて救済したという。これをもって教えを請うもの数百人に及んだ。大正時代（1912～26）まで「泉流に腐造なし」とまでいわれ、県下の指導倉となって、この倉出身の杜氏は泉流の杜氏として県下の酒造場から大いに歓迎された。こし やま越の山は嘉永元年（1848）、はくせつ白雪は安政元年（1854）の創醸である。今は泉流の秘法は知る由もないが、指導を受けた倉元及び杜氏から、初代多賀佐七郎翁の功績を讃えた新保正興の撰せんになるしょうとくひ彰徳碑が庭前の池畔に建てられている。」



また、『同史』「酒のおろし卸と小売」の項には

「地酒では何が最も評判がよいかというと、西蒲原郡弥彦村からでる白雪で、これは私方では七十年前から取次とりつぎをしておるが、値段が高いので、割合に町には売れない。多く郡部に売れる。次が越の山という酒である。毎年の品評会で、いろいろと良い酒も出て、或は白雪あるいは以上のものもあるだろうが、とても声価せいかは白雪には及ばない。」（古町通十番町 赤坂長八氏談）とあります。

（参考文献『新潟県酒造史』松本春雄編 昭和36年新潟県酒造組合刊）